歴史資料館だより

発行者　聖隷歴史資料館
〒四三三―八五五八
浜松市北区三方原町三四五三
聖隷クリストファー大学二号館二階
TEL　〇五三（四三九）三四〇七
FAX　〇五三（四三九）三三四七

聖隷学園特別展開催にあたって

学校法人聖隷学園　専務理事　堀口路加

二〇〇二年以来、七回にわたり行なってきた歴史資料館特別展の最終回となる聖隷学園特別展を開催するにあたり、この特別展にこめた思いをお伝えします。

第一は聖隷のシンボルマークの「青」によって示される教育事業が約八十年に及ぶ聖隷事業の歩みのなかで、いつどのような時代背景と経緯があって産声をあげ、幾多の変遷を辿って現在に至ったかを整理することでした。それを通じて一九四九年の遠州基督学園開設こそが聖隷の教育事業の第一歩であり、聖隷学園の歴史はここに遡ることを再確認したのです。さらに、当時の看護婦不足を背景に一九五二年に開設した聖隷准看護婦養成所（後に聖隷准看護学園）の看護教育の歴史が聖隷学園高等学校衛生看護科へとつながり、それが現在の聖隷クリストファー高等学校、そして聖隷学園浜松衛生短期大学、福祉医療ヘルパー学園、聖隷介護福祉専門学校、聖隷クリストファー大学へと様々な時代背景と結びつきながら発展してきたことを知っていただきたいのです。

第二は、聖隷の精神は聖隷学園の建学の精神、聖隷クリストファー大学と聖隷クリストファー高等学校の教育目的・目標のなかに確かに受け継がれていることを認識することです。一九三〇年十月、結核を患った行くあてのない一人の青年を受け入れた若いキリスト者たちは、イエス・キリストの教えに従い青年のために病舎を作り、「自分のようにあなたの隣人を愛しなさい。」という聖書の教えを実践しました。ささやかな病舎において繰り広げられた「看取る者と看取られる者との共鳴と学びあい」のなかに聖隷学園の教育の原点があったのだと西村ミサ先生は仰いました。大学と高等学校の「聖隷クリストファー」の名称は、大学では「クリストファーがキリストを背負ったように、病人や障害者、お年寄りの不安や苦痛を理解し、大事にケアする人が育ってほしい。」との願いに結びついており、高等学校においては「様々な人の気持ちや痛みを理解できるような、愛の心をもって、人のために役に立つことを大切にする生徒を育てる。」ということを意味しています。聖隷学園は、教育を通し、すぐれた人材を育成することによって「隣人愛」を実践するだけでなく、「隣人愛」を大切な価値観に据えた生徒、「隣人愛」の担い手としての専門職者を育て送り出していこうとしているのです。

第三は一九四九年以来の約六〇年にわたる聖隷学園の歴史で幾度となく訪れた様々な危機と転機のなかで、最も厳しい時に支え、助けてくださった人がいたことを確認すると共に、これからも訪れる危機と転機の中で私たちが失ってはならない姿勢を再確認することです。それぞれの時代、その時々に全力で教育に当たっていただいた数多くの教職員がいますが、聖隷学園の節目となった時厳しい困難のときに支えてくださった方々を紹介しています。

今、聖隷学園は少子化、大衆化、市場化、グローバル化という厳しい荒波に洗われていますが、聖隷クリストファー大学、聖隷クリストファー高等学校もこの困難な状況の中で、五年、十年先の自らのあるべき姿を実現するために様々な計画を立て前に前に進もうとしています。大切なことは「できるか、できないかではなくて、どうしたらできるかを考え、迷ったならとにかく進む。何もしなければどんどん厳しい流れに飲み込まれていく。やればやっただけ良くなる流れをつかむこと。」です。創立者の長谷川保は繰り返し「結果は、やってみなければわからない。」、「どうにもならなくなった時に、はじめて道が開くものだ。」と仰っていました。これまでの学園の歩みにおいても本当にその通りだということが何度もありました。これから進んでいく厳しい環境のなかにあって、教職員一人一人が胸に刻み、受け継いでいくべき言葉だと思います。

聖隷の精神を継承する 遠州基督学園の教育

遠州基督学園　第一期生　地代久子

今から五十八年前（昭和二十四年）遠州基督学園は各種学校の認可を受け昭和二十五年四月には聖隷保養農園の方々に祝福され、遠州基督学園の独創的教育が始まりました。

学園の創立者達の祈りは浜名湖周辺の青年達にキリスト教を伝道すること。地域に出て行きそこで生活している方々の役に立ち、共に喜ぶ人間を育てることでした。

遠州基督学園の初代校長は福原達三先生。第一期生は鳥居暁、長谷川澄（長谷川保、八重子の次女）、安間富喜子、野中てるゑ、地代久子の五名。長谷川澄は父上のご意志を受け継ぎ私たちと共に大きな夢と希望を持ち喜んで入学しました。

学園の授業は午後から始まり福原校長の数学、賀川豊彦先生から派遣された村田豊治先生の理科、西村一之先生の聖書、そして英語、音楽、絵画、洋裁、料理、茶道、華道、西村ミサ先生が見えられ国語が追加、集中講義で日本史など生徒の数倍の教師に恵まれ、福原先生は生徒と一緒に本屋に行き生徒が学びたい数学の教科書を選んで下さいました。夜学では近隣の青年達と一緒に先生から英語を学ぶことが出来ました。

学園の生徒の生活は朝早く起きて午前中病棟で働き、保養農園の松林を歩き小川の橋を渡り松林を登った山の上にある学園に通学。福原校長の礼拝から始まり和英の聖書を用いて英語で読みました。授業が終了すると校長先生から合理的に無駄のない教室の掃除の仕方を習いました。（日曜日になると教室は主日礼拝の場所に用いられます）

夏には「イエスの友夏期聖修会」など多くのお客様が宿泊されます。その接待は長谷川八重子先生が中心となり生徒も手伝います。料理はかまどに釜と鍋をかけ煮炊きしました。風呂は薪を燃やしますが風の通しかたで火力が違うので考えて風呂を沸かしました。私達は福原先生から物事を合理的に考える事、そしてキリスト者として生きる喜びを学びました。

聖隷学園の思い出

聖隷学園高等学校　衛生看護科　第二期生　伊藤晴世

卒業して四十年、聖隷学園での思い出をと考えた時にまず思い出したのは、一期生・足立愛子さんのことです。先輩は小羊学園の子供たちを愛し、生命をかけて人に仕えた方でした。彼女の地上での働きを思い起こす度に「あなたの隣り人を愛せよ」の精神が生きていたのだなあと感動させられます。大切なものって目には見えないというけれども、本当にその通りだという思いがします。

もうひとつ思い出すのは、校訓であった聖書の箇所「私はこう祈る。あなたがたの愛が深い知識において、するどい感覚において、いよいよ増し加わり、それによってあなたがたが、何が重要であるかを判別することができ、キリストの日に備えて、純真で責められるところのないものとなり…」（ピリピ人への第一の手紙一―九～十一）です。当時の聖隷高校にはまさに、この通りの教育が満ちあふれておりました。

三年間、寮でお世話になった私は、大塚千恵子寮母先生（大塚浄子先生のお母様）から、人に仕えることを、行動で示しつつ教えられ、豊かな支えを与えられました。本当に叱ってくださったのも寮母先生でした。テストの成績があまりにひどい結果であった時のことです。夕食後の星空の下「今、何をしなければならないかよく考えなさい」と切々と説かれました。「今しかできない事をしなさい」と…その時の光景は今でもはっきり覚えています。

人を信頼する事、生徒ひとりひとりの持つ輝き・個性を宝もののように思い、引き出してくださった聖隷の教えは、その後の生き方の源となっております。「ああ!!感謝せん」です。そして最後にひとつ付け加えさせていただくならば、聖隷の卒業生は"いざ何か"となれば、きっと皆がひとつになり大きなことができるはずと信じている私です。

想い出すこと

聖隷クリストファー短期大学　第一期生　杉本　民

あまりにも遠い日々の事ゆえ、すべてがぼんやりしている。しかし、二年間の学びの時は楽しく思い出され、懐かしい。一期生には、臨床経験者も多く、年齢層が広かっただけに、つながりはそれほど密ではなかったが、学ぶ事への意欲はそれぞれに高かったように思える。学習科目は専門科目が大半で、医師や看護婦長たちの講義は、いずれ自分たちの職場となる臨床が、目の前に拡がりワクワクしたものであった。

授業には「ゼネラルアワー」という時間が毎週あり、聖隷の歴史が先達たちによって語られた。聖隷の歴史を伝える中で、多くは「聖隷の看護」を伝えるものであったと思う。

聖隷が培ってきた看護は、何より患者本位であること、患者本位の理念は、人の持つ自然治癒力への援助であり、医療者が押しつけるものでは決してないということ。私はその言葉に深く感銘を受けた。こんなお話が印象に残っている、創立期の聖隷では、職員のこどもたちが、自然の中で元気に育っていた。誰もが貧しくそのことは何の問題もないことだった。こどもたちはわかば保育園に通い、給食の時、その日は小魚の煮付けが出たが、頭としっぽだけの魚を食べながらこどもたちは言ったそうだ。「魚のおなかのほうは、患者さんが食べるんだね」と。療養する患者さんに、栄養のある物を食べさせること、それが当たり前の聖隷の常識のように理解され浸透していたのだという。療養する人々を、聖隷のみんなで助け、守ること、この実践がずっと聖隷の看護を伝えてきている。卒業後、仲間たちは全国に散り活躍している。

「聖隷の卒業生がうちにもいますよ、頑張っていますよ」とあちこちで言われる。みんな聖隷の看護を、心に刻んで頑張っているのだと思う。

大学生活を振り返って

聖隷クリストファー看護大学　第一期生　秋山　哲子

卒業から、早いもので十年以上がたちました。保健師として行政で仕事をしていると、なかなか卒業生と顔を合わせることが少なかったのですが、ここ数年そういった機会も多くなり、卒業生が着々と増えていることを実感しています。

聖隷クリストファー大学が看護大学として開学した年、私も看護学生としてのスタートをきりました。全てが新しい環境の中、一年生百名あまりで自由にのびのび楽しく過ごしていたことを思い出します。

一学年だけでしたので、先生方や大学職員の皆様と相談・雑談できる機会にも恵まれ、貴重な時間を過ごすことができました。のびのびしすぎていたであろう私たちを温かく見守ってくださっていた先生方に感謝の気持ちでいっぱいです。

一方で、一期生ならではの大変さもありました。全てにおいて、前例がない中での学生生活でした。今では定着・充実した大学祭も、当時は学生会を中心に、全学生参加で作り上げていかねばなりませんでした。ちょうど同時期に様々な課題のメ切も重なってしまい、大変な思いをしましたが、その分大学祭が無事終了した時の充実感や脱力感は何ともいえないものでした。

在学中、どんなに困難な状況に遭遇しても何とかなるさと乗り越えていくパワーは、この一年間で培われたものだと思っています。それは卒業後も変わっていません。

また、当時何度も耳にした「保健・医療・福祉」という言葉。学生の頃はピンときませんでしたが、いざ仕事を始めてみると、広い視野で物事をとらえる力がついていることに気づきました。大学で学んだことに日々支えられているのだなと感じています。

同級生をはじめ、卒業生が全国各地で頑張っている話を耳にします。これからも保健・医療・福祉の場で活躍する卒業生が増えていくことを願っています。

断想　聖書の力

「十字架のほか誇るものなし」

聖隷学園　宗教主任　鈴木崇巨

「このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。この十字架によって、世はわたしに対し、わたしは世に対して、はりつけにされているのです。」（ガラテヤ六・十四）

「十字架のほかに誇るものがあってはならない。」この精神は聖隷運動を始めた人々の中に流れていたものでした。

角のある動物は角を誇ります。同じように、人間も自分の持っている良いもの、強いものを誇ろうとします。しかし、その姿はなぜか惨めです。誇るならイエス・キリストの十字架を誇れ、というのがこの聖句です。十字架は恥の象徴です。本来、誇るべきものではありません。

この聖句を書いているのは、使徒パウロです。パウロはキリスト教徒になる前には、この世的な誇るべきものを持っていました。

彼は次のように言っています。「わたしはヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、律法の義については非のうちどころのない者でした。」（フィリピ三・五ー六）

パウロは生まれも育ちも良い、ユダヤ人の中にあってはエリート中のエリートでした。しかし、キリスト教徒になってからは、そのようなものを誇ることをやめました。恥の象徴である十字架だけを誇るようになりました。私たちもそのような人間になりたいと思います。

昔、日本はひどい差別国家でした。差別が制度化されていました。それが日本の地面にしみこんでいます。今でも臆面もなく自分の先祖が上流階級であったことを誇る人がいます。そのような人は本当に恥ずかしい人です。

パウロは、また、こうも言っています。「わたしは投獄されたこと、鞭打たれたことは比較できないほど多く、死ぬような目にあったことも度々でした。人に石を投げつけられたこと、強盗に襲われたこともあり、・・・しばしば食べずにおり、寒さに凍え、裸でいたこともありました。」（第二コリント十一・二三ー二七）

なぜパウロはこのようなことを赤裸々に語っているのでしょうか。彼はキリストを通して神がどのような御方であるかを深く悟ったからだと思います。神は全能者であられるのに、へりくだった性質の御方です。キリストは神の御子であられるのに十字架にかかられました。キリストのこの恥ずかしい姿を誇りましょう、とパウロは私たちに訴えています。しかも、これだけを誇り、他の一切を誇らないようにしましょう、と言っているのです。なんという徹底ぶりでしょうか。このパウロの激しい言葉は力となり、その力に突き動かされた人々が人類の歴史の中に大勢出てきました。

◆刊行物のご案内

「山の上の学園　聖隷学園のはじめ」

西村ミサ著

「山の上の学園　聖隷学園のはじめ」は、副題にもあるように、一九四九年に開設された聖隷学園の前身である各種学校遠州基督学園に始まり、その後一九五二年に開設された聖隷准看護婦養成所（一九五九年　聖隷准看護学園に改称）を経て、一九六六年に学校法人聖隷学園を設立し、聖隷学園高等学校衛生看護科が開設されるまでの歩みを記したものです。当時のご苦労話や思い出話が生き生きと描かれている一方、教師・生徒が共に貧しい中にも大変充実した日々を過ごしていたことがよく伺えます。

著者である西村ミサ先生は一九五一年より遠州基督学園にて教鞭を執られ、その後生徒寮の寮母を経た後、高等学校開設当初から一九七八年三月までは初代校長として、深く生徒たちと関わりました。本書の初刊は一九八九年でしたが、二〇〇二年に西村ミサ先生のご家族の了解を得て、聖隷歴史資料館で復刻いたしました。

現在では大学に三学部、大学院博士課程を開設するまでになった聖隷学園ですが、その原点と現在に至るまで変わることがない精神を感じていただける一冊です。